

ハウス柿の通称「ゴリ果」の発生原因について

～高温および土壌の乾燥が「ゴリ果」の発生に及ぼす影響～

加温促成栽培されたハウス柿では、果実表面にへこみが生じ果肉に褐斑が入る、通称「ゴリ果」と呼ばれる生理障害果が発生することがあります。カキのポット樹を用いて、「ゴリ果」の発生原因について調査を行ったところ、高温および土壌の乾燥によって果肉の褐斑が悪化し、高温により果実表面のへこみが増加する可能性のあることが分かりました。

1. 背景と目的

奈良県は、加温促成栽培されたハウス柿の生産量全国1位を誇りますが、「ゴリ果」と呼ばれる生理障害果が発生することがあります(図1、図2)。

症状の著しい「ゴリ果」は廃棄や等級落ちとなります。そこで、発生原因を明らかにするために、高温および水分管理が「ゴリ果」の発生に及ぼす影響について調査したので報告します。



図1 ゴリ果の外観

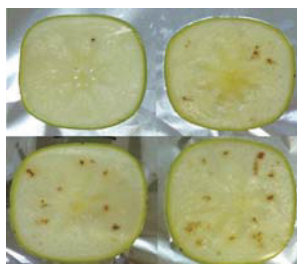


図2 褐斑程度

左上:「微」 右上:「少」
左下:「中」 右下:「多」

合、高温により果面のへこみ数が増加しました(表1)。

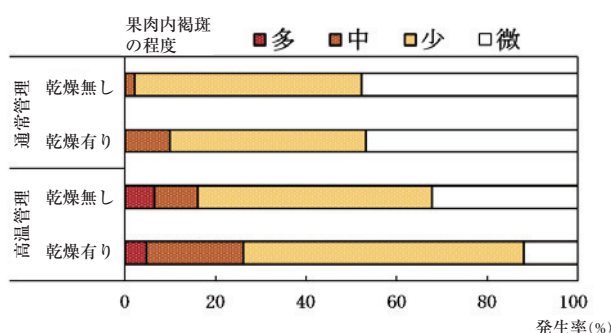


図3 温度および水分管理が果肉内褐斑に及ぼす影響

表1 温度管理が果面のへこみ数に及ぼす影響
(土壌が乾燥しないように管理した場合)

栽培管理	へこみ数(個)
通常管理	1.5
高温管理	4.4

2. 研究成果の概要

カキのポット樹を用いて、最高気温を30℃以下にする通常管理区と、5月中旬から約40日間、最高気温を35℃以下で管理する高温管理区を設けました。また5月中旬～収穫まで、pF2.0を目安に灌水を行い乾燥しないように管理する(乾燥無し)区とpF2.5を目安に灌水を行い乾燥条件にする(乾燥有り)区を設けました。

その結果、高温および土壌の乾燥により果肉の褐斑の程度が悪化する傾向にありました(図3)。また、土壌が乾燥しないように管理した場

3. 実用化に向けた対応

幼果期～着色始め頃にかけて、「ゴリ果」の発生を抑制するためにハウス内高温や土壌の乾燥を避けるようハウス柿生産者へ情報提供を行い、高品質果実の生産に繋げていきたいと考えています。

(果樹・薬草研究センター 市川胤記)